

コムケ湖の現在と未来

おおだて・かずひろ
1958年紋別市鴻之舞生まれ
1976年道立紋別北高校卒業
1981年もんべつかいはつくらぶ設立
現在、北海道自然保護協合理事

大館和広

本文のねらい

紋別市にあるコムケ湖は、渡り鳥の中継地として重要だが地元では理解されていない。コムケ湖の現状を自然・漁業・農業・観光の各方面からとらえ将来の課題を明らかにする。

1. はじめに

コムケ湖はオホーツク海岸の中央部、紋別市の南東約一五キロメートルにある面積約五・八平方キロメートルの海跡湖である。湖はアイヌ語地名のコムケ・トー（曲がり沼）が示すとおり湖岸が曲がりくねっており、湖岸延長が約三二キロメートルある。水深は浅くほぼ全域で一メートル前後のよう、北側の最深部では約五メートルある。湖は一番大きな水域で導水路により海とつながっており干満の影響を受ける。流入する河川は二本あるがいずれも水量は少なく、湖の水質は海水に近いと思われる。

コムケ湖の北西にヤソシ沼が、南東にシブノツナイ湖があり、コムケ湖という自然を考えるとこれらの地域も含めて捉える必要がある。

紋別市には標高〇メートルのオホーツク海岸の海浜環境から、一、三〇九メートルの北見富士の高山環境（といってもハイマツが生育する程度）まである。コムケ湖は紋別市民にとって身近な自然であると同時に、守り育んでいかなければならない自然なのである。

2. コムケ湖の自然

① 自然環境

コムケ湖は三つの水域に分かれており、それぞれ

オホーツク海

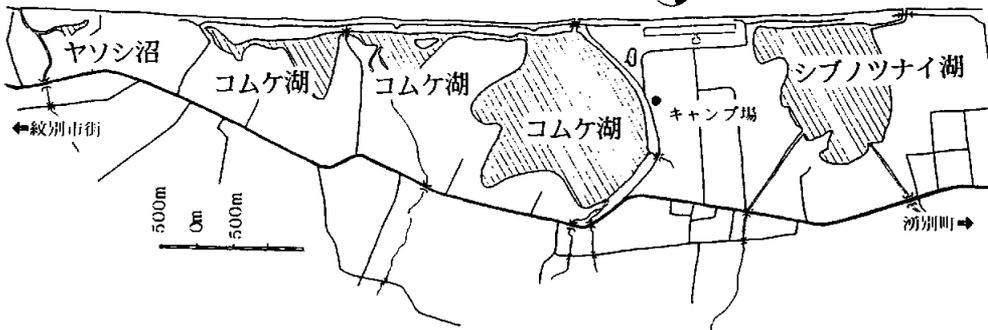


図-1

れが細い水路でつながっている（図一）。湖は海と直接つながっているので干満の影響を受け、湖内には広く干潟が出現する。干潟は南東側が砂質である他は泥質である。

湖は幅一〇〇メートルほどの砂州で海と隔てられており、砂州上に道路が通っている。砂州上は北側で一部農地となっている他は海浜植生となっていて丈の低いハマナス等が生育するが帰化植物の侵入が激しい。

湖の周りにはほぼヨシ原となっていて、そこから湖畔林の間は多彩な多年草からなる低層湿原となっている。湖畔林は最大幅五〇メートル程で、農地の防風林として残されている二次林と思われる、一部人工林となっている。湖畔林の外側はすぐに農地が続いている。

干潟とヨシ原の間は塩湿地となっていて、アッケシソウ等が生育する。

湖の周りには北オホーツクの湖沼群にみられるような広い高層湿原は現存せず、紋別空港（九九／一一移転）の近くに一ha程がかるうじて残っている。

海岸は砂浜海岸であり、近年特に海岸浸食が激しく感じられる。

② コムケ湖の植物

コムケ湖の植生の特徴は塩湿地に成立する植物群落があげられる。アッケシソウ、シバナ、エゾツルキンバイなどがみられる。中でもアッケシソウは年々増加傾向にあるように思う。塩湿地はほぼ全域でみられるが、一番大きな水域と二番目に大きい水域で発達している。

塩湿地の外側はヨシの湿原になっているが、湖の環境から考えるとその面積は狭い。ヨシ原の外側の低層湿原にはヤマアワ、ヤチヤナギや、草原を彩るヒオウギアヤメ、ノハナシヨウブ、サワギキョウ、エゾリンドウなどが群落を作っている。



エゾゼンテイカ

海浜にはハマナスの群落が続き、コウゾリナ、エゾカワラナデシコ等も群落を作っている。

湖の北、ヤシ沼との間にはガンコウラン、エゾゴゼンタチバナ等がみられる。しかし、近年は海側の浸食が激しく生育地が崩壊している。

一部に残る高層湿原にはエゾイソツツジ、ツルコケモモ等が生育し、過去のコムケ湖周辺の環境を知る上で貴重な存在である。

コムケ湖だけに生育する植物はないが、レッドデータブック記載種は七種ある。

コムケ湖の植物にとつての脅威は帰化植物の侵入である。海浜ではすべての場所においてカモガヤ、アレチマツヨイグサがみられ、特にアレチマツヨイグサの侵入が著しい。また、タンポポモド

キ、コウリントンポポ、アメリカオニアザミも増えている。

コムケ湖を代表する花はハマナスであり、紋別市の花にも指定されているが生育状態は良いとは言えない。

③ コムケ湖の鳥類

筆者ら（もんべつかいはつくらぶ）は一九八一年からコムケ湖周辺で鳥類の調査を行ってきた。その結果一九九九年までに二五〇種の鳥類が記録された。一年間に記録される鳥類は一八〇種前後である。記録された鳥類を移動型で分けると、旅鳥約四八％夏鳥約二一％冬鳥約一三％留鳥約七％となりコムケ湖が渡り鳥の湖であるということが言える。



ハマシギとダイゼンの群

これまで記録された鳥類の中で特別天然記念物や天然記念物に指定されている種や種の保存法の指定種、レッドデータブック記載種は三二種におよび全体の約一三%にもなる。

筆者は一九九二年から標識調査を行ってきた。特に一九九五年からはシギ・チドリ類のカラーマーキング調査を実施し大きな成果をあげている。この調査によると九五年から九九年の五年間に標識放鳥されたシギ・チドリ類が全国各地ばかりでなく韓国やオーストラリアで発見されており、コムケ湖を中継地とするシギ・チドリ類が日本を縦断して南下し、越冬地へ渡っていく事が確かめられた。

このようにコムケ湖は小面積ではあるが日本に飛来する渡り鳥にとって非常に重要な地域である。

3. コムケ湖と人との関わり

① コムケ湖と漁業

コムケ湖には漁業権が設定されている。一九八五年に人工湖口により海と永久につながられた。それより以前に湖口付近が幅五〇メートル長さ五〇〇メートル深さ七メートルほど浚渫され海水の流入を計った。湖内で行われている漁業は各種の養殖事業であるが、出荷が軌道にのっているのは五年程前から行われている牡蛎だけのものである。また、湖口付近に番屋を設けて沿岸漁業を営む漁業者もいる。

コムケ湖で漁業を営んでいく上での問題点はいくつかあるようだが、夏期の水温上昇があるという。事実記録的な暑さと小雨だった九九年は多くの牡蛎が弊死したという。これは湖が小さく浅いのと生物的なキャパシティに原因があると思う。

他に農業排水による水質悪化が懸念されるが、問題点の解明や解決に向けての動きは感じられない。

周辺には使われなくなった作業小屋が放置されており、朽ちるにまかせている。更に網に塗布する薬剤の入っていたドラム缶もそのまま放置されている。また、時化により打ち上げられた魚網は放置されることがある。これらが景観上好ましくないとの指摘に行政は関係機関と協議して対処するとしているが、いまだに改善されていない。

② コムケ湖と農業

コムケ湖の周囲は海岸部を除いてほぼ農地として利用されている。営農形態はほぼ酪農であり、牧草地や放牧地が湖の近くまで迫っている。



ホザキシモツケ

湖に近い農地は低標高のために地下水水位が高く、過湿に悩まされている。加えてこの地域は日本でも有数の重粘土地域であり、営農条件は良くない。コムケ湖の自然環境にとって一番の問題は農業との兼ね合いであると思う。

コムケ湖の北のヤンシ沼とヤンシ川では上流域の排水効率をあげるために明渠排水路工事が行われた。工事は環境護岸を取り入れるなど先駆的な内容ではあったが、工事が終了して三年経ったが期待したほどの効果は得られていない。

九八年からはコムケ湖に流入する二本の河川でも明渠排水路工事が始められた。工事の目的は下流域にある農地の過湿の解消と、五〇年に一度の洪水に対処するためである。両河川とも環境護岸を用いるなどして自然環境に配慮した内容ではあるが、過湿の解消という目的が達成されるかどうかは疑問である。

また家畜のし尿の問題がある。周辺農家は汚水の問題に対して熱心であるとは思えない。河川や湖に近い農地に堆肥が野積みになされており、これは雨により容易に河川や湖に流入することが想像できる。

今年八月、湖の北側の水域(コムケ湖の一番奥)でカヌーに乗る機会があった。その折に湖底をパドルで突いてみると、底質はヘドロ化しており腐敗臭が著しかった。これが家畜のし尿の流入によるものかは不明であるが、遠因となっているとは察せられる。

他には牧草が海浜に入り込む被害がある。これらは海岸全域でみられる。更に農地拡大により自然な低層湿原が消滅している。三年前にはシブノツナイ湖にあった高層湿原が消滅した。この高層

湿原にはトキソウやツルコケモモが見られ、小面積ながら保存状態のいい湿原であったので非常に残念な出来事であった。

湿原や自然草原がいつも簡単に農地にされてしまふのは、この地域の自然を行政も市民も理解していないことが原因である。筆者らは機会のあるごとにコムケ湖の自然の重要性を説き、環境調査の必要性を訴えてきたが未だ実現されていない。

③ コムケ湖と観光

コムケ湖の南側湖畔にはキャンプ場があり、五月から一〇月まで開設されている。テントサイトが全面芝生張りのキャンプ場として以前は人気があり利用者も多かったが、他地域のキャンプ場が整備されるにしたがい利用者の伸び悩みが感じられる。

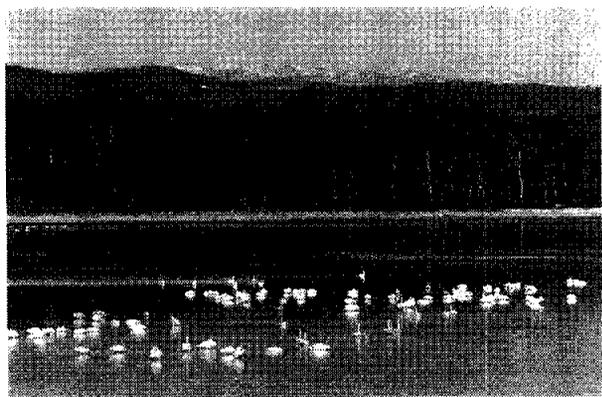
湖と海を分ける砂州に道路が通っており、そこから眺める風景は四季折々に美しい。しかし、訪れる人は車で通り過ぎるだけで、ゆっくりと徒歩で自然と触れ合おうとする人は皆無である。

夏から秋には海岸でキャンプを楽しむ人や、多くの釣人が訪れにぎわう。

観光と自然の一番大きな問題はゴミの問題である。訪れる人の中には平気でゴミを捨てて行く人がいる。湖口付近にはゴミ持ち帰りの看板が立てられているが意に介さない人も多い。

更には植生内へ車を乗り入れる人もいる。近年の4WD車の普及による弊害である。

紋別市では観光を重要な産業と位置付けている。観光パンフレットには地域の自然が紹介されているがコムケ湖など自然の扱いは低いように感じられる。紋別市が目指す観光は、何か奇抜な物(い



群のハクチョウ

わゆる箱物)を作ったり、イベントをやって人を集めるといふ見せ物的で場当たり的な観光であるように思う。それは紋別市がコムケ湖に代表される地域の自然資源や資質を理解していないところ、そこに端を発する。地域の自然を理解していなければ訪れる人たちにガイドも出来ない。さらには地域の自然に愛着も湧かないであろうし、大切にしようという意識も芽生えない。

4. コムケ湖の自然保護

① 保護区

コムケ湖にかかる法的な保護の網は、自然景観保護地区がヤンシ沼、コムケ湖、シブノツナイ湖それぞれ三地区別々に指定されている他に、道設の鳥獣保護区がヤンシ沼からコムケ湖一帯にかけ

て設定されている。

景観保護地区の指定地域は水面部分とわずかな湿地が含まれているだけで、実効のある地区指定とは言い難い。鳥獣保護区はヤンシ沼からコムケ湖キャンプ場までの国道より海側の全域に設定されており、中には民地も多く含まれているが理想的な区域設定である。しかし、最も保護を必要とする区域にも特別保護区は設定されていない。当協会では特別保護区を設定するよう以前に要望書を提出している。

② 自然保護運動

コムケ湖にかかわる自然保護の運動は筆者らが設立した「もんべつかいはつくらぶ」によってなされてきた。鳥獣保護区化を目的とした鳥類調査活動から始まり、市民への啓発活動として「ハクチョウを観る会」の開催、地元新聞へのコムケ湖の自然の紹介記事の連載、写真展などが行われてきた。また、紋別市と協力して市民参加のゴミ拾いも行われてきた。行政に対しては鳥獣保護区内に特別保護地区の設定や、ラムサール条約への登録の働きかけを行っているが、行政の関心は低い。

5. コムケ湖の未来

コムケ湖は紋別市民にとって身近な自然である。にもかかわらず市民に理解されていない自然でもある。

行政にとっては貴重な保護すべき自然環境でありながら、何が貴重でどのように保護を進めていけばいいのか理解されていない自然環境だと言える。

筆者らは行政に対し、機会があるたびにコムケ

湖全体の自然環境調査を行うよう求めてきた。しかし、未だ実現されず今日に至っている。貴重な自然が理解されないまま色々な開発行為が進められてきた姿が現在のコムケ湖の姿である。確かにいままでは開発優先の時代であったかも知れないが、これからは違う。自然との共存や共生を真っ先に考えていく時代になったし、自然なくしては人間の生活も有り得ないのだと漸く理解されはじめた。特に紋別市の場合は基幹産業が自然相手の産業であるので自然とどのように付き合っていくのか、賢い利用が求められる。それは、人間の都合で物を考えるという事ではなく、相手（自然）の都合も考えていくことである。

かつて、流水が邪魔者としか考えられなかった時代に、現代のように観光の目玉になると誰が予測していただろう。

自然を保護していくための自然保護区を設定するのに、これからの開発行為がやりにくくなるから肝心な地域をはずすなどという一昔前の思想があってはならない。自然の資質を十分理解したうえで保護と利用を考えた場合に、時には「何もしない」という自然本意の選択をするという決断が求められる時代なのである。

コムケ湖の自然は、派手ではない何処にでもあるありふれた自然だ。青い水面があつて、緑のヨシ原があつて、遠くに大山が見える。ハマナスが咲き、夏鳥たちが歌い、旅鳥たちが行く。こんな何処にでもある自然がコムケ湖の姿だ。けれどもこんな自然こそが、市民の身近な自然、本当に大切な自然であり、私たちが守り育てていかなければならない自然なんだろうと思う。

美しい花の咲く原生花園を、ハクチョウがたたずむ水辺を、今のコムケ湖の美しい自然を過去形で語ることのないように市民と行政が知恵を出し合い、コムケ湖の自然を育んで行けたらと思う。



冬のコムケ湖

